

他動詞文の無生物3格と中域語順 (1)

時田 伊津子

(東京外国語大学非常勤講師)

1. はじめに

1-1. 他動詞文の目的語3格

ドイツ語には4つの格、すなわち *Nomintiv*, *Akkusativ*, *Dativ*, *Genitiv* があり、そのうち *Dativ* は日本語で「与格」もしくは「3格」と訳されている。本稿ではこの *Dativ* を3格と呼ぶ。3格には、目的語の3格、所有の3格、利害の3格など様々な用法がある。以下のようなものが典型的な例である。

- (1) *Er schenkte der Mutter Blumen.* 彼は母に花を贈った。
- (2) *Sie trat dem Mann auf den Fuß.* 彼女はその男性の足を踏んでしまった。
- (3) *Er hat ihr den Fernseher repariert.* 彼は彼女にテレビを直してあげた。

例文(2)には所有の3格が現れている。3格 *Mann* 「男性」は前置詞句で表された *Fuß* 「足」の所有者である。例文(3)は利害の3格の例である。3格 *ihr* 「彼女」は「彼がテレビを直す」ことにより、利益を受けている。このような所有の3格、利害の3格はもっぱら人間を表す。

また、目的語の3格は、他動詞文¹において主に人間を表すと言われている。例文(1)は典型的な目的語3格を伴う文で、「3格の表す人間に4格の表す物を贈る」という「授与」の文意味を表している。このような文の3格が生物ではなく、無生物を表す場合、例文(4)のように不自然な文となる。研究者によっては、例文(5) a. のような他動詞文の3格も目的語もしくは文の構成に不可欠な補足成分とする定義があるが、3格が無生物を表す b. 文はやはり不自然である。²

- (4) ? *Er schenkte der Vase Blumen.* ? 彼は花瓶に花を贈った。
- (5) a. *Er wusch dem Kind die Hände.* 彼は子供の手を洗ってあげた。
b. ? *Er putzte dem Zimmer die Fenster.* ? 彼は部屋の窓を拭いてあげた。

¹ 他動詞文とは *Akkusativobjekt* (対格目的語, 4格目的語) を伴う文を指す。

² この文の3格 *Kind* 「子供」は、所有の3格であるが、4格 *Hände* 「手」に対する行為の受益者とも考えられ、利害の3格とも解釈できる。

その一方、例文 (6) の 3 格 **Gefahr** 「危険」のように、擬人的な解釈なしに、目的語の 3 格が無生物を表す場合もある。本稿では、このような「無生物 3 格」が実現する他動詞文を考察の対象にする。

(6) **Er setzte das Kind der Gefahr aus.** 彼は子供を危険にさらした。

また、本稿では 3 格と 4 格の語順にも注目する。例文 (1) や (5) a. では、名詞句が 3 格-4 格の順に実現している。このように 3 格が生物を表す文では、無標語順も 3 格-4 格語順だと言われている。それに対し、例文 (6) では名詞句が 4 格-3 格の語順で現れている。このような無生物 3 格の他動詞文において、3 格と 4 格の語順は 4 格-3 格となるのだろうか。

1-2. 先行研究：無生物 3 格

はじめに、無生物 3 格を扱った先行研究を概観する。無生物 3 格は、3 格の中心的な用法でないため、従来あまり研究対象にされなかった。近年では次第に、WEGENER (1985, 1991), JOHANSEN (1988), ZIFONUN ET AL. (1997) など、無生物 3 格にも言及する研究が増えてきた。しかし、まだ無生物 3 格について、十分な分析がなされたとはいえない。その理由としては、例えば次のような点が挙げられる。基本的に 3 格は生物を表すという視点に立っているためか、無生物 3 格を擬人的用法であると読み取れる記述が見られる。また、無生物 3 格と共起する典型的な動詞しか扱っていない場合もある。さらに、詳細な記述はあっても、網羅的な分析が欠けていたり、数多くの事例を扱っていてもデータの信憑性が低い分析も見られる。そのため、無生物 3 格の詳細は、特に実証の面において未だ研究の余地がある。以下では、各研究を簡単にまとめる。

1-2-1. WEGENER (1985) : Der Dativ im heutigen Deutsch.

WEGENER (1985) はドイツ語の 3 格について、その用法や統語的、意味的特徴など全般について記述している。そのうち、意味的記述の章では、3 格と共起する動詞と 3 格の持つ素性に言及している。3 格の素性は 3 つ挙げられているが、そのうちの一つに **Belebtheit** 「有情性、有生性」がある。そこでは、「**Belebtheit** による基準は絶対的な制限規則ではないが、3 格が生物の名詞句を表すという非常に強い傾向がある」(WEGENER 1985: 286) としている。しかし、特定の条件下では生物に限られないとし、その条件として、3 格の名詞の意味クラスと、動詞の意味クラスを挙げている。

具体的な事例は名詞の種類別に検討されている。例えば、**Tote** 「死者」はその(社会的な)場面で **belebt** 「生きている」として扱われれば、3 格で表される。また、**Mobile** 「乗り物」は動くことができ、この特徴は生物の特徴と見なすことができるため、3 格が乗り物を表す文は容認されるという。さらに、抽象物のうち **Naturkräfte** 「自然の力」は動作者的にも考えられるため 3 格として現れやすいことや、**Institutionen** 「機関」はそこで働く人間との間にメトノミーの関係があるため、3 格になると言及されている。

動詞の意味クラスについては、本稿の対象である他動詞に限ると、3格が受容者を表す Transaktionsverben 「所有変化の動詞」で生物という制限を超えやすくなるという。また、特に Korrespondenz 「対応」の関係の成立を表す対称動詞においては、無生物3格も認められる。(WEGENER 1985: 292)

この立場の不十分な点を2つ挙げる。第一に、WEGENER (1985: 289ff.) の記述はあまりに Belebtheit に固執しているため、無生物3格はすべて擬人的用法であるかのような印象を与える。第二に、「所有変化の動詞」の適応範囲が曖昧である。

まず、第一の点については、例文(7)を見てみる。先にも述べたように、乗り物は動くことができ、動かないものに比べ、生物と考えられやすいという。例文(7) a. は乗り物同士が「動くこと」によって衝突する出来事を描写している。ここでは「動くことができる」性質によって、Zug 「列車」が3格になるのかもしれない。それに対し、同時に挙げられている b. 文は「物の取り外し」を表している。この出来事では、3格として現れた Auto 「車」が乗り物であることに、特に必然性はないようだ。この例文の Auto 「車」については生物と似た性質、すなわち「動く」という性質を持つことと、3格になることには関連が見られない。

- (7) a. die Lokomotive fährt dem Zug in die Seite 機関車は列車の側面へ突っ込んだ
b. er baut dem Auto einen neuen Motor ein/aus
彼は車に新しいエンジンを付けた／車から新しいエンジンを外した

また、例文(8)の Kälte 「寒さ」、Schicksal 「運命」など「自然の力」を表すものは、生物学的もしくは動作主的に考えられやすく、そのため3格に現れやすいとしている。しかし、基本的にこの例文の3格が人間を表すことは少ないようだ。例えば、例文(9)に挙げたように、3格が人間を表す文は容認度が低い。WEGENER が挙げた例文(8)において、自然の力が生物的であることと、この項が3格になることには深い関与は見いだせない。

- (8) a. er setzt das Kind der Kälte aus 彼は子供を寒さにさらした
b. sie beugt sich dem Schicksal 彼は運命に屈した
(9) a. *Er setzt das Kind der Tante aus. 彼は子供を叔母にさらした
b. *Sie beugt sich dem Chef. 彼女は上司に屈した

2つめの点として挙げた Transaktionverben は、所有の変化を表す動詞である。WEGENER (1985) はこの種の動詞が表す行為の前の状態を(10) a)、行為のあとの状態を b) と定義している。これはまさに例文(11)には当てはまる。それだけではなく、WEGENER はさらに例文(8)もこの所有変化の動詞に準ずると書いている。しかし、「さらす、屈する、避ける」といった動詞が、所有の変化を表すとは解釈しにくい。

このような点で、WEGENER (1985) の説は再考する必要があると思われる。

(10) a) A hat C, C existiert und befindet sich bei A, B hat C nicht

AはCを持っており、CはAのところにあり、BはCを持っていない

b) B hat C BはCを持っている

(11) Er schenkte der Mutter Blumen. 彼は母に花を贈った。

1-2-2. JOHANSEN (1988) : Der heterogene deutsche Dativ 1988.

JOHANSEN (1988: 27ff.)は無生物3格の実例を多く収集し、分析を行っている。新聞や現代文学などから3格名詞句を持つ文を恣意的に収集し、3価以上の文を約400挙げているが、そのうち約半数の事例が無生物3格を含む文である。JOHANSEN (1988)は、この事例を根拠に、3格がもつばら生物を指示するという従来の見解と、無生物3格は生物3格の用法のメタファーだという考えを否定している。また、収集した事例を観察した上で、無生物3格の実現に一定の規則は認められないと結論づけている。

この著作は、これまであまり注目されなかった無生物3格を、コーパス分析の対象にした点が評価できる。しかし、詳細な統語的・意味的分析を行うこともなく、恣意的に収集した事例における無生物3格の割合が高いことから、無生物3格の性質を結論づけるのは短絡的だといえる。

1-2-3. WEGENER (1991) : Der Dativ - ein struktureller kasus?

WEGENER (1991)は、「3格は構造格か」という問いを扱い、様々な統語的現象を観察した上で、3格は構造格であると主張している。³さらに、通常の3格とは別に、4格に後置される3格が現れる動詞を「比較動詞」のグループと「機能動詞」のグループに分けている(WEGENER 1991: 94ff.)。比較動詞としては *vorziehen* 「～を～に優先する」、*vorstellen* 「～を～に紹介する」、機能動詞としては *aussetzen* 「～を～にさらす」、*unterziehen* 「(4格)に(3格)を受けさせる」が挙げられている。

WEGENER (1991: 95ff.)によれば、機能動詞と結びつく3格は、構造格ではなく語彙格だという。その理由として挙げられているのは、1) *bekommen* 受動が不可能であること、2) 否定詞の *nicht* など副詞類の無標語順をもとに考えると、3格がVPの内部に実現されるといえること、3) レーマである4格名詞句を後置できないことなどである。この4格に後置する3格には、通常の3格(構造A)と異なり、構造Bを仮定している。

(12) (構造A) [_{V'} NP_{Dat} ... [_V NP_{Akk} ... V]]

(構造B) [_{V'} NP_{Akk} ... [_V ... NP_{Dat} V]]

³ 文の構造に依存し、特定の動詞の元で同じθ役割を持ったまま任意に交代できるような格を構造格という。例えば、*ich sehe ihn* 「私は彼を見る」の4格 *ihn* と、*er wird gesehen* 「彼は見られる」の1格 *er* がこれに該当する。ドイツ語ではこのように1格と4格が典型的な構造格である。それに対し、語彙格は、動詞の語彙的性質によって実現が決定し、構造格のように格交代しない。例えば、*sie hat das Buch auf den Tisch gelegt* 「彼女はその本を机の上に置いた」の前置詞格 *auf den Tisch* がこれに当てはまる。(Wegener 1991)

比較動詞は、普通の3価動詞の性質も持っているが、Bのような構造も備えているという(WEGENER 1991: 97f.)。比較動詞については、1) 35%のインフォーマントが3格-4格の順に現れる語順を容認し、レーマの4格も後置できる点、2) bekommen 受動が条件付きで認められる点、3) 否定詞を3格と動詞の間における点を指摘している。

この論文では、4格-3格語順の事例にも目が向けられ、統語的特徴にまで言及がある。しかし、機能動詞の例は aussetzen, unterziehen, unterwerfen しか挙げられておらず、該当する他の動詞も見られない。また、比較動詞以外は、文意味について言及することもない。そのため、「機能動詞」とまとめられているグループの全体像は明らかになっていない。

1-2-4. ZIFONUN ET AL. (1997) : Grammatik der deutschen Sprache.

ZIFONUN ET AL. (1997: 1312ff.) は基本的に WEGENER など先行研究に準じ、aussetzen, unterziehen などの3格補語は一般的な3格とは区別されるとしている。これらの動詞は無標語順⁴が「主語>4格>3格」となる3価の動詞群に当てはまり、3格は無生物を表すと記述されている。それに対し、一般的な3格を取る動詞の場合、無標語順が「主語>3格>4格」で、3格は生物を表すという。

また、この aussetzen に代表される動詞群については、以下の点などを指摘している。

1) このグループにはもっぱら接頭辞を持つ動詞が属し、この接頭辞は語源的には場所を表す。(13)に挙げた対応関係のように、接頭辞と前置詞の関係が想定される。3格補語は歴史的に見ると副詞的補語に対応するという(WEGENER 1990)。

(13) unter eine Sache ziehen → einer Sache unterziehen
あることの下に入れる→あることを受けさせる

2) 3格は基本的に抽象物、4格は人間を表す。3格名詞句は動詞と共に意味的にまとまりをなし、(14)の einer Gefahr aussetzen が gefährden に対応するように、基本的に対応する単純な動詞がある。

(14) jemanden einer Gefahr aussetzen — jemanden gefährden
誰かを危険にさらす—誰かを危うくする

3) überlassen, übergeben, ausliefern のような接頭辞動詞では、4格が無生物であると必ず「主語>3格>4格」という語順が保たれるが、4格が人間であると、3格補語が人であるか抽象名詞であるかに関わらず、語順が「主語>4格>3格」になる。

⁴ ZIFONUN ET AL. では「階層」としている。

- (15) ... daß er dem Freund seinen Wagen nicht überließ ...
彼が友達に彼の車をゆだねなかったこと
- (16) ... daß er den Freund nicht seinen Feinden überließ ...
彼が友達を敵にゆだねなかったこと
- (17) ... daß er den Freund nicht seinen Depression überließ ...
彼が友達を憂鬱な状態にゆだねなかったこと

ZIFONUN ET AL. (1997) はこのように、aussetzen, unterziehen のような動詞の構文についても詳細に記述している。通時的な視点についてはもっぱら WEGENER (1990 など) に準じているようだ。動詞は、典型的な aussetzen, unterziehen, unterwerfen に加え、3) の部分で überlassen (übergeben, ausliefern) にも言及がある。このように、無生物3格を伴う動詞に、生物3格と異なるタイプの構文を持つものがあることは明示されているが、典型的な動詞以外にどのような動詞があるのか、また「語順」や「接頭辞」、「指示対象」などとは別の視点から見た場合、どのような特性が特記すべきなのかは明らかになっていない。

2. 問題提起

以上をふまえた上で、本研究では、他動詞文における無生物3格の特性を考察する。その際、生物3格の事例との対比も行う。以下では、まず第3節で、分析対象とする事例を収集する。続いて第4節で、文の意味的分類を提案し、第5節でコーパスから収集した事例の形態的・統語的傾向を文意味タイプ別に調査する。

このようにコーパスから事例を分析する目的は、実際の言語使用におけるふるまいを観察するという点にある。確かに、いくつかの辞書にはヴァレンツ、意味に加え、多くの例文が記載されている。しかし、それだけでは明らかにならない情報もある。例えば、3格そのものの特性については、指示対象、代名詞・名詞などの実現形態、共起する冠詞、情報の定・不定などがある。さらに3格と共起する4格の特徴や、2つの項の間の統語的・意味的關係なども辞書の記述だけでは明らかにならない。本稿は、コーパスから収集した事例を分析対象とし、実際の言語使用に見られる現象から無生物3格の特性を抽出するという立場を取る。

3. 事例収集

調査に入る前に、事例の収集方法について述べる。現在のところ、無生物3格を対象に文を検索することはできない。そのため、今回は動詞を手がかりに事例を収集する。まず辞書から該当する動詞を収集し、その動詞を元に Mannheimer Korpus I, II で事例を検索する。

3-1. 動詞収集

他動詞文における無生物 3 格の全体像を解明するには、無生物 3 格が実現する文意味タイプをできる限り網羅する必要がある。そのためには、なるべく多くの動詞を万遍なく収集し、その動詞の現れる文を分析することが不可欠だ。その条件を満たすと考えられるため、動詞は辞書を用いて収集する。

3 格を取る他動詞はランゲンシャイトの『外国語としてのドイツ語大辞典』("Langenscheidts Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache" 1999) の CD-ROM 版 (以下では LG と略記) から収集した。他動詞のうち、ヴァレンツ表記に jemandem/etwas 「誰か (生物) / 何か (無生物)」, etwas (Dat) 「何か (無生物)」が記載されている動詞に限定すると、計 75 動詞が収集できた。リストを以下に挙げる。本稿では、この 75 動詞について分析を行う。

(表 1) LG より収集した動詞 75

abgewinnen	bewilligen	opfern	vorziehen
anfügen	entgegensetzen	preisgeben	weißen
angleichen	entnehmen	schenken	widersetzen, sich
angliedern	entreißen	setzen	widmen
anhaben	entringen	stellen	zufügen
annähern	entziehen	übergeben	zuführen
anpassen	ergeben	überlassen	zugeben
anschließen	eröffnen	überordnen	zugesellen, sich
aufopfern	fügen, sich	untermischen	zuleiten
ausliefern	geben	unterordnen	zumessen
aussetzen	gegenüberstellen	unterstellen	zuneigen
beifügen	gleichmachen	unterwerfen	zuordnen
beigeben	gleichschalten	unterziehen	zurechnen
beiheften	gleichstellen	verdanken	zuschießen
beilegen	herunterreißen	vererben	zuschlagen
beimengen	hingeben	verschließen	zuschreiben
beimessen	hinzufügen	verschreiben	zusetzen
beimischen	nähern, sich	voranstellen	zuwenden
beugen	öffnen	vorlegen	

3-2. 事例収集

ここでは、LG から集めた動詞 75 を手がかりに、分析対象とする事例をコーパスから収集する。対象とする事例はいずれも無生物 3 格を取る他動詞構文とする。

事例収集のソースは、マンハイムのドイツ語研究所 (Institut für Deutsche Sprache, Mannheim; IDS) による書き言葉アーカイブ (Archiv der geschriebenen Sprache) のうち、マ

ンハイムコーパス 1, 2 (Mannheimer Korpus 1, 2; 以降, MK と呼ぶ) とした。

事例収集の際に, 「無生物 3 格」とする基準は次のように定める。人間や動物に加え, 神や悪魔などもつばら擬人的に扱われるものは除く。人間が属する機関, 組織, 国家などは, 擬人的な解釈も可能であるが, 概念や立地, 建物などを意味する場合は無生物と考えられる。例えば Kirche 「教会」や Geschäft 「店」は建物を指すことも, 教会や店に属する人を意味して擬人的に用いられることもある。例文 (18) a. の 3 格 Kirche は擬人的であるのに対し, b. の 3 格 Geschäft 「店」は建物を表している。このような語はいずれも無生物 3 格として数える。なお, Familie 「家族」, Gruppe 「グループ」, Team, Mannschaft 「チーム」など, 単に人の集合を表す語は, 生物と見なし除外した。

- (18) a. hat die Medizin der Kirche ihre alte Herrschaft entrissen 医学が教会から古くからの統治権を奪った。
b. die Wohnung, die sich dem Geschäft anschloß 店に隣接している住居

また, 本稿では, 無生物 3 格のみならず, それと共起する 4 格についても統語的・意味的特徴を観察するため, 受動文は分析対象から外す。その他の文は, 能動文のみならず, 不定詞句も対象とする。不定詞句に関しては 3 格と 4 格が現れていることを選択の基準とした。

このように, 検索を行った結果, LG による動詞 75 のうち, 59 動詞の 1206 例が分析対象として該当した。動詞と主な意味を (表 2) に挙げる。

(表 2) MK に該当事例が見られた動詞 59

abgewinnen	～から～を得る	entgegensetzen	～に～を対置する
anfügen	～に～を添付する	entnehmen	～から～を取り出す
angleichen	～に～を適応させる	entreißen	～から～をもぎ取る
anhaben	～に (何か) をする	entziehen	～から～を取り去る
annähern	～に～を近づける	ergeben	(自分) を～に服従させる
anpassen	～に～を合わせる	eröffnen	～に～を開く
anschließen	(自分) を～に加わる	fügen	～に～を継ぎ合わせる
aufopfern	～を～ (3 格) の犠牲にする	geben	～に～を与える
ausliefern	～に～を引き渡す	gegenüberstellen	～に～を対比させる
aussetzen	～に～をさらす	hingeben	～に～を差し出す
beifügen	～に～を添える	hinzufügen	～に～を付け加える
beilegen	～に～を添える	nähern	～に～を近づける
beimengen	～に～を加える	öffnen	～に～を開ける
beimessen	～に～を認める	opfern	～に～を捧げる
beimischen	～に～を混ぜる	preisgeben	～に～をゆだねる
beugen	(自分) を～に屈服させる	schenken	～に～を贈る

setzen	～に～を設定する	weihen	～に～を捧げる
stellen	～に～を引き渡す	widersetzen	(自分)を～に反抗させる
übergeben	～に～を手渡す	widmen	～に～を捧げる
überlassen	～に～を譲る	zufügen	～に～を加える
unterordnen	～に～を従属させる	zuführen	～に～を供給する
unterstellen	～を～(3格)の監督下に置く	zuleiten	～に～を引き込む
unterwerfen	(自分)を～に応じさせる	zumessen	～に～を配分する
unterziehen	～に～を受けさせる	zuneigen	～に～を近づける
verdanken	～に～を負っている	zuordnen	～に～を分類する
verschließen	～に(自分)を閉ざす	zuschlagen	～に～を認める
verschreiben	(自分)を～に専念させる	zuschreiben	～に(4格)の原因があるとする
voranstellen	～を～の前に置く	zusetzen	～に～を混ぜる
vorlegen	～に～を提示する	zuwenden	～に～を向ける
vorziehen	(3格)より～を好む		

3-3. 生物3格の事例

無生物3格との対比を行うために、生物3格の事例も同じコーパスから収集する。その際、対象とする動詞は WEGENER (1985) に基づき、目的語3格と共起する典型的な動詞から代表的なものを選んだ。

WEGENER (1985: 263ff.) には、典型的な3格動詞が挙げてある。そこから(19)のように「授与」の関係を表す他動詞と、(20)のように4格の「状態変化」を表す他動詞をそれぞれ4つ選んだ。前者は、kaufen「買う」、schenken「贈る」、stehlen「盗む」、wegnehmen「奪う」、後者は waschen「洗う」、putzen「磨く」、verbinden「包帯する」、erleichtern「軽減する」である。特に状態変化を表す動詞については、3格を伴う事例数が比較的多いものを選んだ。該当する事例は計294例となった。

(19) Er schenkte der Mutter Blumen. 彼は母に花を贈った。

(20) Er wusch dem Kind die Hände. 彼は子供の手を洗ってあげた。

4. 意味的分類

分析のはじめに、文の意味的分類を行う。辞書から収集した動詞と辞書の文例を観察した結果、事例を5つの文意味タイプに分類できることが分かった。これを「付加」、「影響」、「方向」、「適応」、「比較」のタイプと名付ける。以下では、各タイプの意味的特性を述べたあと、コーパスから収集した事例がどのタイプに当てはまるのか分布を示す。

4-1. 5つの文意味タイプ

第一の文意味タイプは、付加・付着や取り外しを表すタイプである。すなわち「(何か)

に（あるもの）を付ける，（何か）から取り外す」といった文意味を表す。例文（21） a. は，3 格 **Strauß**「花束」に 4 格 **Karte**「カード」が付着，付属するという関係を表している。このような関係の二者を「全体」と「部分」と見なす。（21） b. では，全体である 3 格 **Etui**「ケース」から 4 格 **Brille**「めがね」が取り出される行為を表している。本稿では，この文意味タイプを「付加」のタイプと呼ぶ。

- (21) a. **Er hat dem Strauß eine Karte beigelegt.** 彼は花束にカードを付けた
b. **Er entnahm dem Etui eine Brille** 彼はケースからめがねを取り出した

第二の文意味タイプは，影響の関係の成立・解消を表す。「（あるもの）を（何か）にさらす，任せる，（何か）から逃れさせる」というような出来事を記述する。例文（22） a. では，3 格 **Gefahr**「危険」が 4 格 **Kind**「子供」になんらかの影響を及ぼす関係が成立している。逆に，b. は，4 格 **sich**「自分」を 3 格 **seinen Händen**「彼の手」から逃れさせる行為を描写している。このような文を以下では，「影響」の文意味タイプを表すと見なす。

- (22) a. **Er hat das Kind der Gefahr ausgesetzt.** 彼は子供を危険にさらした
b. **Sie entzog sich seinen Händen.**
彼女は彼の手から逃れた（自分を彼の手から引きはがした）

次に，方向の関係を表す文意味タイプが想定できる。これらの文では「（あるもの）を（何か）に近づける，向ける」という文意味となる。例文（23）では，3 格 **Ohr**「耳」が 4 格 **Mund**の動く方向を表している。そのため，このような文意味タイプを「方向」のタイプと名付ける。

- (23) **Er hat den Mund ihrem Ohr genähert** 彼は口を彼女の耳に近づけた

さらに，適応を表す文意味タイプがある。このタイプの文は，例文（24）からも分かるように，「（あるもの）を（何か）に合わせる，適応させる」という文意味を表現する。このタイプを以下では，「適応」の文意味タイプとする。

- (24) **Er hat die Kleidung der Mode angepasst** 彼は服を流行に合わせた

最後の意味タイプは，比較を表す。以下では「比較」の意味タイプと呼ぶ。このタイプの文は「（あるもの）を（何か）と比較・対比する，（何か）に優先する」といった関係を表す。

- (25) **Er stellte Fassung A der Fassung B gegenüber.** 彼は A 版を B 版と対比した

4-2. 文意味タイプとコーパス事例

このように無生物3格を伴う他動詞文には5つの意味タイプが想定できる。コーパスから収集した事例を、動詞単位でタイプ別に分類すると、(表3)のような結果になる。生物3格の動詞の事例数も合わせて挙げる。無生物3格の事例では、付加と影響の文意味タイプに該当する動詞が明らかに多いことが分かる。これらは無生物3格の事例において、中心的な文意味タイプだと考えられる。それに対し、方向、適応、比較の動詞は数少なく、それに従って事例数も少なくなっている。動詞によっては、一つの文意味タイプだけでなく、いくつかの文意味タイプの事例が見られるものもあった。なお、今回は、そのような8つの動詞は、以下の分析から除く。生物3格の事例も合わせ、それぞれの意味タイプに該当する動詞を以下の(表4)に挙げる。

(表3) 意味タイプ別動詞数

	生物3格の事例		無生物3格の事例					
	状態変化	授与	付加	影響	方向	適応	比較	複数可
動詞数	4	4	19	23	3	1	5	8
事例数	54	240	412	447	69	34	44	200

(表4) 意味タイプ別動詞一覧

3格	意味タイプ	動詞
生物	状態変化	erleichtern, putzen, verbinden, waschen
	授与	kaufen, schenken, stehlen, wegnehmen
無生物	付加	abgewinnen, anfügen, anhaben, beifügen, beilegen, beimengen, beimessen, beimischen, entnehmen, geben, hinzufügen, schenken, setzen, vorlegen, zufügen, zuleiten, zumessen, zuschreiben, zusetzen
	影響	aufopfern, ausliefern, aussetzen, beugen, entziehen, ergeben, hingeben, öffnen, opfern, preisgeben, übergeben, überlassen, unterordnen, unterstellen, unterwerfen, unterziehen, verdanken, verschließen, verschreiben, weihen, widersetzen, widmen, zuschlagen
	方向	annähern, nähern, zuneigen
	適応	anpassen
	比較	angleichen, entgegensetzen, gegenüberstellen, voranstellen, vorziehen
	複数可	anschießen, entreißen, eröffnen, fügen, stellen, zuführen, zuordnen, zuwenden

5. 形態・統語的傾向

次に、文意味タイプ別に分類したコーパス事例について、形態・統語的特性を調査した

結果を挙げる。第一に、3格と4格の名詞句の特徴に注目し、名詞句の表す内容が定の情報と不定の情報のどちらを表しているかを分析する。定と不定の区別は、基本的に名詞句の形態に基づく。冠詞を伴う名詞句は冠詞の種類によって判断し、定冠詞や所有冠詞などは定、不定冠詞などは不定とした。無冠詞の名詞句の場合、固有名詞は定とし、その他の名詞は不定とした。代名詞は種類によって定と不定を区別した。

第二に、文の中域で3格と4格が実現する順序において、「3格-4格」語順と「4格-3格」語順のいずれの頻度が高いかを探る。中域というのは、主文においては定動詞と、文末の分詞や分離動詞前綴りに囲まれた部分、副文においては従属接続詞と文末の動詞に囲まれた部分を指す。

この2つの点について、それぞれ生物3格の事例との対比も行う。なお、方向、適応、比較の各意味タイプについては、動詞数も事例数も少ないため、今回は付加と影響の2タイプについて調査結果を示す。

5-1. 名詞句の特性

まず、名詞句の特性の傾向を見る。3格と4格のそれぞれが不定の名詞句か、定の名詞句かを調査し、定の名詞句であれば、定の名詞、代名詞、再帰代名詞のいずれであるかも提示する。

5-1-1. 3格の傾向

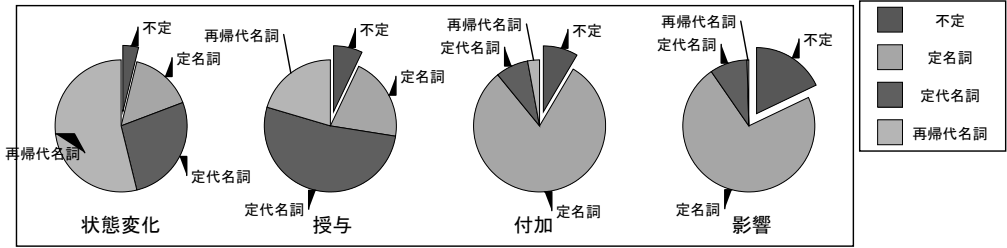
まず、3格の傾向を見ると、いずれの文意味タイプの3格も定の要素が8割を超え、不定の3格の頻度が低いことが分かる。但し、生物3格では再帰代名詞を含め代名詞が6~7割を占める一方、無生物3格では名詞の割合が高い(7~8割)という違いが見られる。これは、文意味タイプではなく、生物と無生物の違いに基づくのかもしれない。⁵ 事例数は(表5)と(図1)のようになる。グラフでは左の2つの円が生物3格の事例、すなわち状態変化と授与の文意味タイプの事例を表し、右の2つの円が無生物3格の事例、付加と影響の事例に関する結果である。

(表5) 3格の傾向 (事例数)

		生物3格の事例				無生物3格の事例			
		状態変化		授与		付加		影響	
不定		2		17		35		80	
定	名詞	50	8	223	49	377	332	367	324
	再帰以外代名詞		14		125		33		41
	再帰代名詞		28		49		12		2
計		52		240		412		447	

⁵ この点については、今後の検討課題とする。

(図1) 3格の傾向



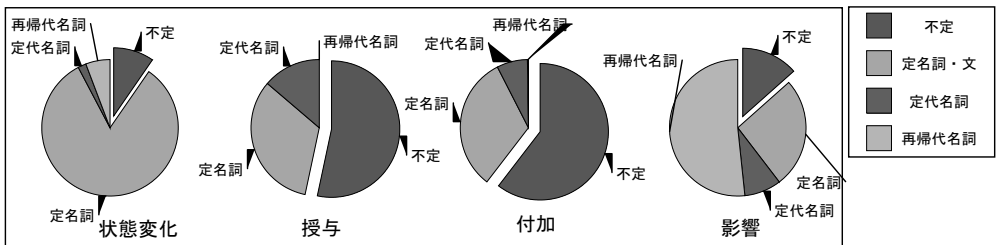
5-1-2. 4格の傾向

4格の特性については、3格とは明らかに異なる傾向が見られる。授与の文意味タイプと付加の文意味タイプでは共通して、不定の割合が半数以上を占めている。定の名詞句の特徴を合わせてみても、この2つの意味タイプに見られる4格の傾向は類似している。それに対し、状態変化を表す文では、定の名詞が約9割を占めている。この文意味タイプの4格は主に生物3格の所有物や身体部位を表している。影響の文意味タイプでも、4格が定の事例数が8割以上と多いが、特に再帰代名詞の頻度が高い。このように、4格の特徴の傾向は、3格が生物か無生物かという点ではなく、文意味タイプによって差異が見られることが明らかになった。事例数は以下の(表6)と(図2)に示す。

(表6) 4格の傾向 (事例数)

		生物3格の文		無生物3格の文	
		状態変化	授与	付加	影響
不定		5	128	249	60
定	名詞, 文	43	79	132	117
	再帰以外代名詞	1	33	30	39
	再帰代名詞	3	0	1	231
計		52	240	412	447

(図2) 4格の傾向



5-2. 中域語順

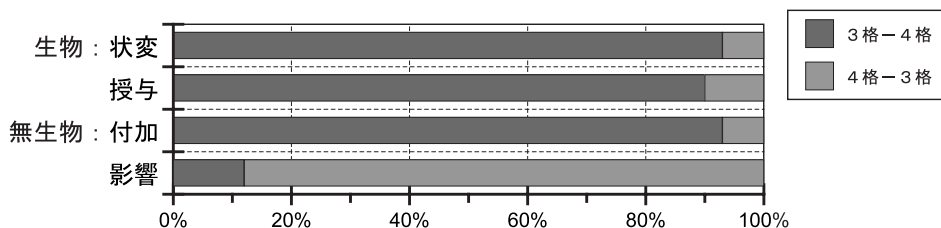
次に、中域語順の傾向を文意味タイプ別に示す。中域というのは、先にも述べたように、主文では定動詞と、文末の分詞や分離動詞前綴りに囲まれた部分、副文においては、従属接続詞と文末の動詞に囲まれた部分を指す。この中域で3格と4格の名詞句が実現する順序が、「3格-4格」語順であるか「4格-3格」語順であるかを調査する。なお、3格と4格のいずれかが文頭に現れる事例は除いた。

状態変化、授与、付加の事例では、3格-4格の語順が9割以上の高い割合を占めている。一方、影響の事例では、4格-3格の語順の頻度が88%と高くなっている。ここでも、4格の特徴と同様、授与と付加の文意味タイプの類似性が現れている。事例数は(表7)と(図3)に挙げる。

(表7) 中域語順の傾向 (事例数)

	生物 3 格の文		無生物 3 格の文	
	状態変化	授与	付加	影響
3 格-4 格	45	176	316	45
4 格-3 格	3	20	24	330
計	48	196	340	375

(図3) 中域語順の傾向



5-3. まとめ

3格と4格の特性と、中域語順の傾向を文意味タイプ毎にまとめると、次の表のようになる。改めて、付加と影響のタイプの形態・統語的な相違が明らかになり、授与の文意味タイプと付加の文意味タイプの類似性が確認できる。この授与と付加は、例文(26)、(27)からも分かるように、文意味タイプそのものも似ている。3格における生物・無生物の違いはあるが、いずれも4格が表すもののやりとりを表現している。このように、形態・統語的傾向は、3格が生物か無生物かという問題よりも、文意味タイプの類似性の方により深い関連があると考えられる。

(26) Er schenkte der Mutter Blumen. 彼は母に花を贈った

(27) Er hat dem Strauß eine Karte beigelegt. 彼は花束にカードを付けた

(表 8) 意味タイプ別 事例の傾向

	生物 3 格の事例		無生物 3 格の事例	
	状態変化	授与	付加	影響
3 格	定	定	定	定
4 格	定	不定・定	不定・定	定
語順	3 格-4 格	3 格-4 格	3 格-4 格	4 格-3 格

6. おわりに

以上、本稿では、無生物 3 格の現れる他動詞文をコーパスから収集し、文意味タイプ別に形態的・統語的傾向を観察した。タイプ毎の対比や、生物 3 格の現れる事例との対比を行うと、授与のタイプと付加のタイプの類似性が明らかになり、この 2 つのタイプと影響のタイプとの相違が浮き彫りになった。このことによって、先行研究で機能動詞としてまとめられていた動詞を、所有変化（授与）の動詞や比較動詞と同じように、文意味のレベルで捉えることができた。さらに中域語順に注目すると、状態変化、授与、付加の文意味タイプは 3 格-4 格語順、影響の文意味タイプは 4 格-3 格語順と関連があり、それぞれが無標語順ではないかと考えられる。

今後は、これらが無標語順であるかどうかの検証や、今回扱わなかった「方向」、「適応」、「比較」の文意味タイプについても分析を行いたい。

言語資料

Langenscheidts e-Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache. 規模：66,000 語収録。

Mannheimer Korpus I, II：制作：IDS, 規模：345 テキスト, 約 250 万語, 年代：1949～1974 年, 内容：文学, 回顧録, 研究書・通俗科学の文献, 大衆文学, 新聞・週刊誌の記事など。

参考文献

JOHANSEN, Ingeborg 1988: Der heterogene deutsche Dativ 1988. Zur Syntax, Semantik und Sprachgebrauchsbedeutung. Heidelberg: Winter (Germanische Bibliothek).

WEGENER, Heide 1985: Der Dativ im heutigen Deutsch. Tübingen: Narr (Studien zur deutschen Grammatik 28).

WEGENER, Heide 1990: Komplemente in der Dependenzgrammatik und in der Rektions- und Bindungstheorie. Die Verwendung des Kasus im Deutschen. In: Zeitschrift für germanistische

Linguistik. 18. S. 150-184.

WEGENER, Heide 1991: Der Dativ - ein struktureller Kasus?. In: Fanselow, Gisbert/ Felix, Sascha W. (Hgg.): Strukturen und Merkmale syntaktischer Kategorien. Tübingen: Narr. S. 70-103.

WEGENER, Heide 1995: Die Nominalflexion des Deutschen als Lerngegenstand. Tübingen: Niemeyer (Reihe Germanistische Linguistik 151).

ZIFONUN, Gisela/ Hoffmann, Ludger/ Strecker, Bruno/ Ballweg, Joachim/ Brauße, Ursula/ Breindl, Eva/ Engel, Ulrich/ Frosch, Helmut/ Hoberg, Ursula/ Vorderwülbecke, Klaus 1997: *Grammatik der deutschen Sprache*. 3 Bände. Berlin: de Gruyter (Schriften des Instituts für Deutsche Sprache 7, 1-3).